

明暗をわけた鉢呂と柿木

浅野 一弘

三つ目の議席を争う熾烈な戦い

第二四回参議院議員通常選挙の結果、三議席目を獲得した鉢呂吉雄と辛酸をなめた柿木克弘の差は、わずか八四四一票であった。ということは、北海道内一七九市町村のおおので、四八票ずつ動いていれば、当落は変わっていたわけだ。ここからは、今回の鉢呂の勝利が薄氷をふむものであったという事実がわかる。「勝てば官軍」ということばがあるが、それだけで今回の選挙戦を片づけてしまってもいいのであろうか。

鉢呂の勝利は偶然のたまもの？

二〇一六年六月二日の公示日当日、鉢呂の第一声は、北海道大学正門前で発せられた。北大の場合、一講時の開始時間は八時四十五分であるが、鉢呂がマイクを握ったときにはすでに、始業時間を過ぎていた。ということは、陣営では、大学の時間割をチェックせずに、第一声の時間帯を設定したように思えた。そのため、若者が第一声に耳を傾けたいと思っても、授業との関係で、それが

できなかつたのだ。これでは、北大前での第一声という行為そのものが、一八歳選挙権を意識した、単なるパフォーマンスにとられかねない。

鉢呂は、出馬表明の折り、「若者の安心のできる職場、あるいは大学や専門学校で、ほんとうに授業料やその生活が厳しい状況」にあつて、「わべだけの選挙目あての社会保障政策は、道民のみなさんから、みすかさされる」(傍点、引用者)と豪語していたが、厳しい言い方をすれば、鉢呂の第一声の場所の選定こそ、「うわべだけの選挙目あて」といわれても仕方がないものであつた。

こうした事実が若者に伝わったからであらうか、一八歳、一九歳を対象とした、北海道新聞社による出口調査において、鉢呂は二一・五％しか獲得できず、「落選した自民党新人の柿木克弘氏の方が五・六ポイント高い一七・一％」との結果もでていた(『北海道新聞』二〇一六年七月二日、二〇画)。

また、今回の鉢呂の出馬をめぐる疑問も最後までとけないままであつた。周知のように、鉢呂は衆議院議員総選挙で七回当選した実績を有する。出馬表明の席で、鉢呂は、「北海道選挙区三名区だからこそ、ここで、この憲法改悪をストッパーかける」との意気込みを語つてはいたが、なぜ、

衆議院議員であつた人物が、参議院にくらぐえするのかについて、明確な理由を示さなかつた。参議院を衆議院落選組の再チャレンジの場とらえるような姿勢こそが、「良識の府」といわれる参議院軽視の動きを助長しているように思えてならない。たとえば、参議院に設けられている、「国の統治機構に関する調査会」において、「衆参両院の在り方について」は、「衆参の役割分担の明確化」をうたい、「参議院の目指すべき姿について」は、「参議院が独自性を発揮すること」に言及した調査報告書を取りまとめている(『第百九十九回国会 参議院国の統治機構に関する調査会会議録 第五号』二〇一六年五月一八日、一頁)。こうした動きに対して、衆議院からのくらがえ組の一人である鉢呂はどのようにコメントするのであろうか。

また、今回、北海道選挙区では、事前に、野党共闘を求める声があつたにもかかわらず、北海道五区補欠選挙時(四月二四日)のような野党共闘は実現しなかつた。「自民の二議席獲得を危惧した共産票が民進に流れた」という共産党・北海道委員会幹部の発言からもわかるように(『毎日新聞』(地方版)二〇一六年七月一三日、二九面)、消極的な意味での野党共闘があつたからこそ、鉢呂は勝利の栄冠をつかんだのだ。

そのように考えていくと、鉢呂の勝利は、たまの要素がよかつたといわざるを得ない。幸いなことに、民進党は、三議席中二議席を獲得した。だからといって、「終わりよければすべてよし」という姿勢ではなく、今回の選挙戦の的確な総括をすることが必要となってくる。たとえば、

積極的な野党共闘にいたらなかったことをめぐっては、その是非に関する意見集約をしていかなければならない。それができない場合、三年後の参議院選挙はもちろん、きたるべき衆議院選挙や北海道知事選挙での勝利にも赤信号が点滅する可能性大である。

さらに、鉢呂に偶然的勝利がもたらされた背景には、対立候補である柿木というタマの悪さに助けられたことも忘れてはならない。

柿木は公明票をまとめきれたのか？

自民党関係者の分析によれば、柿木の敗因は三つあるという。一つは、自民党があらさまに柿木にだけ力を入れすぎたため、残酷との思いがはたらき、自民党支持者の票が、長谷川岳に流れたというものだ。たとえば、これは、選挙戦中に来道した「安倍晋三首相は、札幌市内での街頭演説七回のうち五回で柿木氏だけを隣に立たせた」という事実にもみとれる（『朝日新聞』〔北海道版〕二〇一六年七月一三日、三二面）。

二つ目は、長谷川以上に、柿木が原発再稼働を明確にした点であるという。関係者の言を借りれば、「あの高橋はるみでさえ、原発再稼働をほかにしていた」にもかかわらず、柿木はふみこみすぎたこのことだ。そして三番目の理由が、新党大地代表の鈴木宗男が前面にすぎた事実である。たとえば、北海道新聞社の「出口調査では、支持政党を大地と答えた人は全体の〇・四%にとどまった」という指摘からも（『北海道新聞』二〇一六

年七月一八日、四面）、新党大地のわずかな票を求めたために、自民党の大きな票が逃げていったといえる。

つぎに、出口調査の結果をもう少し詳しくみてみよう。朝日新聞社が実施した調査によると、「公明支持層」の実に四〇%が柿木に投票したとされる。他方、おなじく同党が推薦していた長谷川には、「公明支持層」の二七%の票しか流れていない（『朝日新聞』〔北海道版〕二〇一六年七月二日、二九面）。また、札幌市内に限定した北海道新聞社の調査でも、長谷川は公明党支持層の三三・九%を集票しただけだが、柿木のほうは四九・一%もを集票しただけだ（『北海道新聞』〔札幌圏版〕二〇一六年七月一日〔夕〕、一五面）。また、全道を対象とした同社の調査でも、長谷川の得票のうち、公明党支持者のものは六・五%でしかないが、柿木の場合、一四・二%にもおよんでいる（『北海道新聞』二〇一六年七月一日、五面）。

ここで、一六・〇二%という期日前投票の投票率のたかさに注目したい。というのは、この期日前投票が、柿木敗北の一因になっているような気がしてならないからだ。関係者の「公明票を後半からですもん、柿木によせたのは」という声や、北海道における創価学会の幹部による「最終盤は柿木一辺倒でやった」との発言からもわかるように（『読売新聞』〔北海道版〕二〇一六年七月二日、三五面）、公明党の路線転換の段階では、もうとくすでに遅しで、高投票率の期日前投票における公明党支持者の票の大部分は、柿木ではなく、長谷川に流れていたとみてよいのではなからうか。

ところで、北海道の政治に精通した人物によると、事前の世論調査であれ、当日の出口調査であれ、「公明党の支持者はうそをつくことが多い」ということがしばしば現実であれば、後半戦になって、ほんとうに、公明党支持者の票が柿木に流れたのかという疑問もでてくる。なぜなら、柿木の主張が従来の公明党の訴えと正反対のものであったからだ。たとえば、『朝日新聞』〔北海道版〕二〇一六年六月二十八日、二二面）のアンケート調査をみると、「憲法九条の改正に賛成ですか、反対ですか」との問いに、柿木は、「賛成」と答えているし、朝日新聞社と東京大学による共同のアンケート調査（『北海道版』二〇一六年七月五日、二八面）でも、「首相には靖国神社に参拝してほしい」には「賛成」を、そして、「永住外国人の地方参政権を認める」との設問には、明確に「反対」との回答をよせているのである。

ということは、本来、憲法九条の改正に乗り気でなく、首相の靖国参拝に否定的で、永住外国人の地方参政権を認めようという立場の公明党が、柿木を推薦するという行為自体、まちがっていたのだ。それゆえ、公明党支持者のおおのが、党の判断が誤っているとの認識をもち、柿木に票を入れないという選択をしたとしてもなんら不思議ではない。

このほか、柿木の政治家としての資質なども落選の原因になったといえるが、紙幅の関係上、ここで筆をおきたい。